

久志芙沙子の短歌二首発見

地域文化研究科南島文化専攻言語文化領域

2011 M 05 宮 里 初 枝

「滅びゆく琉球女の手記」の作者として知られる、久志芙沙子の台湾在住時代の短歌が、二首見つかった。本学図書館所蔵の『臺灣日日新報』（マイクロフィルム版 1926〈昭和元〉年 12 月 27 日付）の投稿欄を調査中に発見したものである。

「滅びゆく琉球女の手記」は、1932（昭和 7）年『婦人公論』6 月号に掲載された作品である。しかし、第一回目が掲載された後、東京の沖縄県人会や京浜学生会からの抗議や近親者の反対により、やむなく連載は中断される。これに対し、久志芙沙子は翌 7 月号の『婦人公論』誌上に『釈明文』を発表したが、結局、この「筆禍事件」の後、芙沙子は断筆したとされる。

民族に序列をつけ、「アイヌ人や朝鮮人と同一視されては迷惑」とする学生会の主張を痛烈に批判した久志の「釈明文」は、今日でもその先駆性が高く評価されている。一方、久志テキストそのものの研究はそれほど進捗していないのが現状である。近年の研究では、初期の投稿時代の短歌や創作や晩年のエッセイ、回想なども紹介され始めており、研究史の上でも今回の発見の意義は大きい。以下に簡単な解題を付して紹介する。

◇出典 『臺灣日日新報』（1926〈昭和元〉年 12 月 27 日付）の「台日歌壇」に掲載。筆名は安良城芙沙子

泣き疲れねむりし吾子の枕べにすわりてをれば心痛しも

1922（大正 11）年 19 歳で結婚した久志は台北に移住。翌 1923（大正 12）年に長男繁を出産している。吾子はおそらく繁ではないだろうか。この歌が詠まれたのは、繁 3 歳のころだと思われる。二首目の歌と兼ね合わせて考えれば、熱でも出して体調が悪く泣き疲れて寝むってしまったのだろうか。枕元で体調を心配しながら、見守っている作者の気持ちが感じられる。

病癒え汝が好むかの夜の街を父母と歩は如何ならむ吾子

やっと元気になった子どもと一緒に、台湾の夜の街を散歩する。子どもは久しぶりの外出に心を弾ませている。3 歳という可愛い盛りで、両親に手を引かれながら、目を左右に動かし街の様子に興味津々である。「如何ならむ」は吾子に問いかけているが、作者自身へ問いかける言葉でもあったのだろうか。繁は、新聞に短歌掲載の 50 余日後、1927（昭和 2）年 2 月 19 日に急性腸カタルで早逝する。3 年余の命であった。